

さて大学の潜在顧客は、受験勉強といううんざりするような沼地をながいてなんとか抜けると、大学の顧客になる。この段階では「勉強しない病」が出てくる。

これら二種の病気は、いずれも勉強がかかっている点で共通している。だが、前者ではハードな勉強を強いられ、後者ではまったく勉強しないという、あまりにも鮮明な対照をみせている。「勉強しない病」という病気にたいして、われわれ教師のなかには、「近頃の学生は勉強しない」とこぼす人がいる。この人たちは、大学時代に熱心に勉強した特殊な（良い意味で）人種である。筆者を含む大部分の「普通の人種」は、いまの学生と大差ないことをやってきたのだから、こういうぐちをこぼす資格はない。

ともかくこの病気の原因は、後述するように、どちらかというところ、学生自身よりも、教育界の外部、そして教育界内部では教育サービスを売る大学側にあると思われるので、「学生がこの病気にかかっている」とは断じにくい。症状が学生に出るだけである。

ところでこの二種の病気は、もう長いあいだ慢性化している。これにたいする治療努力がなされていらないわけではないが、快治にはほど遠い、というのが現状である。

なお「受験競争病」と「勉強しない病」とのあいだには——前者に疲れて、入学後に勉強しないということも多少はあるが——それほど強い関係はなさそうである。

ところで過当受験競争病については前章で述べたので、本章では主に、勉強しない病について考える。

1 節 「勉強しない病」の外部原因

病状とその持続メカニズム

「勉強しない病」の症状は、受講届を出しながら、ほとんど出席せず、しかし試験にだけは出てくるというものである。私の場合も、半年間の講義の終り頃には出席者が激減しているのに、試験となると教室にあふれている学生をみて、いつも驚きを覚える。

こうした低出席率症状が原因となって派生してくる症状としては、「甘い採点」がある。

低出席率が甘い採点を生むメカニズムは、①低出席率の学生の多くには、まともな採点すれば、合格点を与えられない、②したがってまともな採点では、多数の不合格者が出る、③けれどもかれらは、「反省してつぎの機会にはまじめに出席し勉強する」という行動はとらない（不合格にするのは、勉強してもらうためののに）。

したがって④かれらは、つぎの機会の試験でも不合格になる、⑤そこで教師側には、こうしたことを考慮して、「甘い採点で合格させてしまうのが合理的」という認識が出てくる（注1）。そして⑥こうした教師側の行動（注2）は、学生側に「ろくに出席しなくても、合格できるのだ」と認識させる。そしてさらに⑦学生のこの認識は、低出席率症状を強化し、そして①へ戻る……